

売るっつー!!フィルムカメラ 集めようっつー!!フィルムプリント

ついに、というか、いよいよ、というか、2008年1月分をもって、カメラ映像機器工業会(CIPA A)が公表しているカメラ生産出荷実績表から「フィルムカメラ」の項目が消えた――。

この理由について、CIPAは「集計上の規定を満たさなかったため」としているが、長年あったフィルムカメラの項目が実績表から削除されたことに寂しさを感じるとともに、あらためて現在のカメラ業界は「デジタルカメラ」を中心に成り立っていることを思い知らされる。

そんななか、本特集では「フィルムカメラ」にスポットを当てた。「何故いまさら?」と思われるかもしれない。しかし、フィルムカメラを取り上げたのには理由がある。「いまフィルムカメラを売ったって、誰も買わないよ」と断言するのであれば、それは現在のカメラユーザーを十分に見ていない(把握していない)ことになる。



カメラや写真を愛してやまない人たちが集まるWebコミュニティサイト「カメラピープル」を運営する有限会社モノグラムが1月25日、東急東横線・学芸大学駅近くにオープンした写真店「カメラピープルストア&ライブラリー『monogram』」。カメラ販売コーナーには、トイカメラやハーフ判カメラなどが陳列され、人気を集めている

フィルムカメラは、一眼レフやコンパクトのほかにも、ピンホールやトイ、ハーフ判、二眼レフなど、様々なタイプが存在する。街を歩いていると、こうしたフィルムカメラを持って撮影を楽しんでいる若者や女性を見かけることがある。彼らのなかには、デジタルカメラを所有している人も多くいるはずだ。カメラ付ケータイは、ほとんどの人が持っているだろう。撮っ

た写真を液晶画面ですぐに確認できるデジタルカメラやケータイの良さを知っているはずなのに、なぜフィルムカメラを使用するのか?その答えは、実にシンプル。『フィルム撮影が面白い』からだ。

フィルムカメラユーザーのなかには『撮影レベルの向上にとりわけこだわることなく、肩の力を抜いて撮影を楽しんでいる』という人もいるが、失敗写真があると『なぜ失敗したのか?』を考え『どうすれば上手く撮れるか?』について勉強する。デジタルカメラと違って、フィルムカメラで撮った写真は、現像してプリントするまで『どんな写真が撮れたか?』が分からない。フィルムならではの特性を活か

して、自分がイメージしていた写真に近い仕上がり得られると格別に嬉しい――こうした点が『面白さ』につながっているようだ。

また、ファッションやアート関係などを勉強している学生のなかには、自身が描いたデザインを記録するために、フィルムカメラで撮影する人もいるという。記録用として、カメラ付ケータイを使ったり、デジタルカメラを購入するのではなく(デジタルカメラに比べて)安価なフィルムカメラを使用するというケースも多々あるようである。一方、プレゼント用とし



昨年、ケンコーが発売した35mmフィルム一眼レフカメラ「ケンコーKF」シリーズ。久しぶりのフィルム一眼レフ新製品の登場となった。現在も多くのユーザーから高く支持されている

てフィルムカメラを購入する人も少なからず存在する。

いずれにせよ、デジタルカメラとは違ったスタイル、デザインを持つフィルムカメラは『個性豊かなカメラを持ちたい（またはプレゼントしたい）』などというユーザーの購買意欲を促すことになるだろう。だからこそデジタルカメラだけでなく、フィルムカメラも積極的に取り扱い、より多くのユーザーを囲い込むべきだ。『誰で



トイカメラは「ホルガ」を中心に人気を博しているが、トイカメラ人気のきっかけを作ったのが「ロモ」だ。その「ロモ」のなかでも、とりわけ著名な製品として知られているのが「LOMO LC-A」だ。同機は、2005年4月にロシアでの生産が終了したが、翌年からオリジナルの形、レンズはそのままに機能アップさせた「LOMO LC-A+」（写真）が中国で製造されるようになった

も気軽に楽しめるフィルムカメラ』といった括りで商品を並べて、お客に注目してもらえようになりたい。

これに付随して、同コーナーにはフィルムも必ず陳列すること。このようにしてカメラとフィルムを販売し、購入してもらえれば、フィルムプリント受注へとつながる可能性が高まる。

フィルム撮影が幅広く楽しめる、魅力溢れるカメラ&関連アクセサリをラインアップ!

デジタルカメラだけでなく、フィルムカメラも人気がある——ということはお分かり頂けたかと思うが『販売にあたっては、どんなモデルを取り扱えばいいのか?』と疑問を持つ読者もいることだろう。ここからは、そんな読者のために、株式会社エー・パワー（本社・埼玉県所沢市）がラインアップしている、人気の高いフィルムカメラを紹介することにしよう。

トイカメラやホビーカメラの輸入・販売などを行っているエー・パワーは、平成17年4月に設立され



日本写真協会の協力により、4月25日に埼玉県川口市で開催された「ピンホール写真体験ワークショップ」には、園児や小学生の親子のほか、ピンホール写真初心者も参加。ピンホールカメラ製作やモノクロプリントなどが体験できるようになっていた

た。同社の代表取締役社長である安藤芳浩氏は、以前は日本ポラロイドに勤務。長きに渡って、ポラロイドカメラやフィルムの拡販、マーケティング関連の仕事に携わってきた。

日本ポラロイドが、デジタル時代に於いて家電事業にも積極的に取り組むようになってきたなかで「アナログカメラの魅力を訴求すること」にこだわってきた安藤氏は、同社在職中に開発した「ホルガ by ポラロイド」やピンホールカメラなどを通じて銀塩写真市場の

活性化を図るべく、日本ポラロイドより分離独立し、株式会社エー・パワー（※社名の「エー」には、安藤氏の名字のA、アナログカメラのAといった意味が込められている）を立ち上げ、トイカメラやホビーカメラのほか、関連商品の販売にも注力。現在は、日本写真映像用品工業会の会員、日本針穴写真協会の賛助会員となっている。

ポラスタイル（※ポラロイドを通じて生活をいかに楽しめるかを考え、追求していくことを目的に作られた日本ポラロイド公式ウェブサイト。現在は更新停止中）には、安藤氏が日本ポラロイド在職中に手掛けた「ホルガ120S F Camera Set III」が掲載されている。製品名にⅢとあるように、同機は「ホルガ by ポラロイド」の3代目にあたる。「ホルガ by ポラロイド」の初号機は「不完全カメラ」といわれたトイカメラ「ホルガ」に、日本ポラロイドのアイデアと技術を加えて、トイカメラ史上初のマルチカメラとして注目を集めた。

「ホルガ」をカメラ本体にして、別付けした専用ホルダーでポラロイドフィルムが使えるという発明は、とても画期的なことであった。一見、ただ単純に付け替えただけの



エー・パワー 安藤芳浩社長

設立後もトイカメラやホビーカメラ事業のさらなる発展に向けて前進してきたが、2006年2月、米国ポラロイドコーポレーションによるCB80（フィルム・ホルダーの機構部品）の生産終了に伴い、ホ

ようだが、そこには被写界深度や露光の調整といったカメラ撮影における基本的な構造の研究とテストを何度も行い、製品として世に送り出した。この開発は『シンプルだけに奥が深いカメラ』というプロダクトの魅力を再確認した作業であった——これは、ポラロイドに掲載されている、安藤氏による同機の開発秘話である。後に、三脚用アダプターやストラップ穴を追加し、全体的にコンパクトな形に仕上げた2代目が登場。そして3代目では、ポラロイドフィルムの全面撮影ができるようになった。

■「なければ作る」という精神で製品開発・販売に着手

「1万円を切るカメラ」の開発に取掛かり、最初に作り上げたのが、レンズとシャッターを省略した「ピンホールカメラ」だ。『アナログならではの、味わい深い写真が楽しめる』ことから、かなりの人気を集め、拡販に成功した。

次に着手したのが「レンズやシャッターを付けたモデル」の販売だ。いろいろと研究しているなかで「当時の私の部下が中国製のホルガカメラを米国で入手してきた」という。それを基に作られたのが「ホルガ b y ポラロイド」である。これもリーズナブルな価格で販売。2002年の5月に1代目を、2003年4月には2代目を、そして2003年11月にはタイプ80シリーズの全面に撮影できる3代目を発売し、立て続けにヒットを飛ばした。

製品開発に注力し、エー・パワー

設立後もトイカメラやホビーカメラ事業のさらなる発展に向けて前進してきたが、2006年2月、米国ポラロイドコーポレーションによるCB80（フィルム・ホルダーの機構部品）の生産終了に伴い、ホルガファンに惜しまれつつも、日本ポラロイドでは3型ホルダーの販売終了を余儀なくされた。そこでエー・パワーは、ポラロイドのタイプ80シリーズとフジ・フォトラマのレギュラーサイズの両方が使えるホルガ120シリーズ用インスタント・フィルム・ホルダー「Poligastun4」を開発した。

同機は、ポラロイドのタイプ80シリーズを使用すると全面に撮影でき、またフジ・フォトラマのレギュラーサイズ（またはポラロイドのスタンダードシリーズ）を使用すれば7・3cm×7・3cm（右側に約2cmの黒い余白付き）で撮影することが可能。『ホルガ120でインスタントフィルムを使えるようにしてほしい』というホルガファンの要望に応えた。

一方、ピンホールの分野においても、開発・販売活動に力を入れている。安藤氏は日本ポラロイド在職中の2001年7月に紙製ボディの組み立て式による「ピンホールフォトキット」を、また2004年3月には「ピンホール80ひまわり&オリーブ」を、そして独立直後の2005年4月には「ピンホール80ブラウンシユガー」を開発し、市場投入してきた。

前述したように、CB80の生産



HOLGA 135

☆キング・オブ・トイカメラといえば「HOLGA」☆

中国製トイカメラ「HOLGA（ホルガ）」の人気は依然として根強い。HOLGA120所有者のなかには、35mmアダプター付きで使用するユーザーも多く存在することから、エー・パワーは35mmフィルムが使える「HOLGA135」を、同社のオリジナル・クローズアップ・レンズ付で5,880円という求めやすい価格で発売。また、トイカメラファンの中で人気の高い「周辺光量落ち」写真が撮れるように特殊加工を施した「HOLGA135BC」（同レンズ付で6,930円）や、ピンホール版の「HOLGA135PC」（レリーズ付で5,880円）も発売し、ホルガ人気をより強固なものにした



ピンホールブレンダー社製パノラマピンホールカメラ(写真⑥)は、円形ボディの側面にあるピンホールと、フィルムの回転を組み合わせてイメージを「ブレンド」できるユニークな撮影装置だ。また同社では、針穴写真の楽しさを一層深める香港・Zero Image社製の木製ピンホールカメラ(写真⑦)も取り扱っている



終了に伴い、ピンホール80は全機種販売終了となったが、イー・パワーは昨年4月に、ポラロイドのタイプ80シリーズとフジ・フォトラマのレギュラーサイズの両方が使えるピンホールカメラ「ピンホール100」を発売した。

同機は、フジ・フォトラマのレギュラーサイズ(またはポラロイドのスタンダードシリーズ)の全面に写し出されるように設計されているが、イメージサークルが広いのでポラロイドのタイプ80シリーズを使用しても、左右の露光量にほとんど差のない写真が撮れるようになっていた。

針穴写真は、肉眼で見た絵とは違ったものが写る。『何が写っているのか、すぐに見たい』というユーザーには、写したその場ですぐに見られるインスタントフィルム仕様のピンホールカメラが最適だ。デジタルカメラは、液晶画面で撮り画像を確認できるが、ピンホールカメラには『アナログならではの味わい』が楽しめる。こうした点が、とくにデジタル世代のユーザーには、かなり新鮮な印象を与えているようで、ピンホール写真の人気も高まってきている。そういったなかイー・パワーでは、インスタントフィルムに関し

ては「SX-70 BLEND FILM」や「VIVA COLOR」などの販売を終了している。一方、ポラロイド社は今年2月に「デジタル製品が市場に定着するなか、インスタントフィルムの需要が減少し続けている」ため、入念な検討を重ねた結果、インスタントフィルムの生産を今夏までに終了することを発表した。しかし、富士フィルムの「FP-100C」など、生産終了となっていないインスタントフィルムも存在する。インスタントフィルムを使用する(または使用したいと考えている)ユーザーには、あらためてこうした点をしつかりと認識させたいところだ。

■「フィルムカメラ」を積極的に売って「フィルムプリント」の受注につなげる

一方、イー・パワーは、PIE2008にブース出展した際に、同社の製品に関する質問を記したアンケート用紙を、会期中、来場者に配布したが、前回(PIE2007)の倍以上の回答が得られたという。来場者から寄せられた意見は「今後の製品開発の参考にします」そうである。デジタルカメラの新品を展示する出展社が多々存在していたなかで、同社のフィルムカメラに興味を持つ来場者が非常

☆新設計ボディの「PINHOLE100」☆



ボディカラーはバス(アイボリー)とロッカー(グレー)の2色を用意

「ピンホールフォトキット」や「ピンホール80ひまわり&オーブ」開発のノウハウを生かした絶妙な画角が「ピンホールらしさ」に満ちた味わいのある写真を生み出す——「PINHOLE(ピンホール)100」は、80シリーズ(6.9×7.2cm)とレギュラーサイズ(7.3×9.5cm)の2つのフォーマットが使用可能。イメージサークルが広いので、80シリーズを使っても左右の露光量にほとんど差がない。価格は1万6,800円(フジFP-100C・1本付)

に多く見られたのが印象的であった。

現在のカメラ業界は、確かに「デジタルカメラ」が全盛だ。とくにデジタル一眼レフカメラ市場は大きな伸びを見せている。一方、フィルムカメラの出荷は、本特集の冒頭でも触れたように、2008年1月分をもって算出されなくなった。こうした状況を単純に見れば、カメラの販売コーナーには売れ筋のデジタルカメラを陳列する必要があるだろう。しかし、そうしたモデルを置いたことで、売上アップにどれだけ寄与するのだろうか？

量販店に行けば、様々な新製品を「お買い得価格」で購入することができる。またネット環境にあるユーザーは、価格比較サイト「価格ドットコム」をチェックすることで「どのお店（またはネットショップ）に行けば、最安値で買えるか？」という情報を入手することが可能だ。

もちろん、一般的なカメラ店、写真店でも『お奨めのデジタルカメラ』を販売すれば、購入するお客はいるだろう。しかし、その販売コーナーに『ちよつとオシャレなフィルムカメラ』も置けば、より一層、注目を集めるはずである。

本特集で取り上げた「ホルガ」

は、製品カテゴリーとしては「トイカメラ」の部類に入るが『トイカメラ』おもちゃカメラ』と安易に捉えないでほしい。「売り手」にとつては「おもちゃカメラ」に見えても「買い手」には「使ってみたいカメラ」なのである。お店側は「売る必要はない」と判断しても、トイカメラやホビーカメラ、関連アクセサリーを求めているユーザーは、実際には数多く存在している。

こんな例がある。『レンズキャップを紛失した』というホルガユーザーが、近所のカメラ店を探し回ったところ、その地域のお店にはどこにも売っていないかったため、インターネットで調べたらエー・パワーのホームページに辿り着いたという。そこで探し求めているレンズキャップを購入することができて、大変喜んでいたようである。

安藤氏は「トイカメラの『トイ』はおもちゃという意味ではなく『人に問う』という意味の『問い(トイ)』である」と捉えている。デジタル化が進むなか、発売される新製品は高機能かつ利便性に優れ、人が「考える」という機会が少なくなってきた。カメラにおいても、シャッターを押せば、初心者でも簡単に高画質な写真が撮れる時

代だ。

もちろん、それはそれでいい。しかし『どうやってたら写真が上手く撮れるか?』を考えさせてくれるカメラがあつてもいいだろう。むしろ、デジタル世代のユーザーにとつては、その「考える行為」が楽しくもあり、独特の表現でフィルム撮影を満喫している。

そしてもうひとつ、強調しておきたいことがある。トイカメラやピンホールカメラなどが人気を集めているという状況は、カメラ店や写真店にとつては、ハードが売れるだけでなく、フィルムプリントの受注拡大が図れるチャンスでもあるのだ。

『カメラを売って、プリント受注につなげる』という、フィルム時代では当たり前だった図式が、デジタルカメラの台頭によって大きく変わった。しかし、フィルムやフィルムカメラを売れば、現像やプリントにつながる可能性が高まる。事実、トイカメラやピンホールカメラなどを積極的に取り扱い、フィルムプリント受注を集めることに成功している写真店も存在している。フィルムカメラを取り扱っていない（または取り扱おうのを止めた）のならば、トライしてみるのは十分にある。



☆上海製の二眼レフカメラ「SEAGULL」☆

ウエストレベルでカメラを構え、上からスクリーンを覗き込んで、じっくりとピントを合わせる——そんな二眼レフの魅力を身近なものにする上海製の現行モデル「SEAGULL (シーガル)」。レンズタイプと巻き上げ方式の違いで選べる3モデル4機種をラインアップしている。価格は、SEAGULL 4B-1=2万5,200円、同4A-105=3万1,500円、同4A-107=3万5,700円、同4A-107G=3万7,800円となっている。トイカメラやピンホールカメラと同様に、二眼レフカメラの人気も高い

フィルム撮影を楽しむ、写真クラブの活動状況



「おもカメ大会」の参加者は、トイカメラなどで撮影した写真をプリントして、それをスクラップブック形式で作品づくりを行い、ギャラリーに掲示。参加者全員の投票によってグランプリ作品を決定する（写真は同倶楽部のブログに掲載された「春の大会」の様）

による投票で順位を決め、表彰を行う。その後、入賞者が「作品づくり」に對する考え方などについて、スピーチを行う——、お開きにする——という、1日完結型のイベントになっている。「青少年おもカメ倶楽部」のメンバー構成比

率（昨秋時点）は、高校生が50%と半分を占めており、大学生ならびに専門学校生は20%、一般人は30%となっている。男女比は女性55%、男性45%と女性の割合が高い。なお参加者の平均年齢は36〜37歳。

現在、会員登録されているメンバーは、高校OBも含めて60人強。一時期のように30人の参加者を超える大会は少なくなり、10人前後の参加者で大会が行われるようになってきている。今年5月11日に開催された「春の大会」は8名と、参加者は少なかつたが、大会当日は大いに盛り上がり、非常に濃い内容となった。撮影されたフィルム本数は計15本で、12インチ四方のスクラップブック用台紙を使用し、計10点の作品が完成した。会の運営に携わっている関係者は「自分の撮りたい写真を頭に描きつつ、そのカメラの特性を生かして、露出やピントを工夫し、調節してシャッターを切る——これらを自動で調節してくれる今日のカメラには、本当に優れた技術が集約されている、と改めて思い知らされる」と前置きした上で「その一方、技術が発達するのは反比例して、状況に合った撮り方を読み取る力が失われているのではない

北海道旭川市には、小中高の生徒や大学生、保護者、一般の社会人など、様々な人たちが集まって、写真を撮ったり、発表したり、展示したり、講習会を行うなど、忙しくも、慌ただしくも『写真を楽しんでいける』元氣いっぱいの写真クラブが存在する。

「青少年おもカメ倶楽部」は、2005年12月に北海道立旭川工業高校・写真部顧問の先生が、旭川市内の他校の写真部顧問の先生に呼び掛けて発足された写真クラブである。市内の高校生の自主参加により本格的な活動がスタート。メンバーは高校生が中心となっているが「若い気持ちのある」大人の参加も歓迎しているという。

毎月1回（基本的には第一土曜日）例会を開催し、弁当やおやつを持ち込みながら「おもカメ」に関する話題で盛り上がったたり、撮影し

た写真を見せ合ったり、入手した珍しい「おもカメ」を紹介するなど、毎回ほのぼのとした雰囲気での会が進行している。

クラブ名にもある「おもカメ」とは『面白いカメラ』や『おもちゃのカメラ』などの略語で、参加者はトイカメラをはじめとする様々なカメラを使って写真を楽しんでいる。年に3回（春・夏・冬）開催されている「おもカメ大会」では、朝から撮影を行い、昼前には撮影を終了させ、カメラ店の協力を得て撮影した写真をプリントする。プリントが出来上がるまでの間、おもカメに関する講習会や情報交換会、自慢話等々と、様々な交流会を行っている。

プリントが出来上がったら、参加者それぞれがスクラップブック形式で作品づくりを行い、ギャラリーに掲示してメンバーによる投票で順位を決め、表彰を行う。その後、入賞者が「作品づくり」に對する考え方などについて、スピーチを行う——、お開きにする——という、1日完結型のイベントになっている。

現在、会員登録されているメンバーは、高校OBも含めて60人強。一時期のように30人の参加者を超える大会は少なくなり、10人前後の参加者で大会が行われるようになってきている。今年5月11日に開催された「春の大会」は8名と、参加者は少なかつたが、大会当日は大いに盛り上がり、非常に濃い内容となった。撮影されたフィルム本数は計15本で、12インチ四方のスクラップブック用台紙を使用し、計10点の作品が完成した。会の運営に携わっている関係者は「自分の撮りたい写真を頭に描きつつ、そのカメラの特性を生かして、露出やピントを工夫し、調節してシャッターを切る——これらを自動で調節してくれる今日のカメラには、本当に優れた技術が集約されている、と改めて思い知らされる」と前置きした上で「その一方、技術が発達するのは反比例して、状況に合った撮り方を読み取る力が失われているのではない

か？との危機感もある」と指摘する。

「不便さ」は、むしろ「子供たちには必要なこと」だという。「失敗を重ねて、工夫をして、ようやく思い通りのモノが撮れる面白さ。その魅力を若い人たちに知ってほしい」との願いから、高校生を中心に呼び掛けて「青少年おもカメ倶楽部」が結成されたのだ。

若い人たちにとって「おもカメ」は新鮮に感じるようで、同倶楽部のメンバーは「ぼやけた画像や足りない露出などを逆手にとって作品づくりをする。そこに楽しさがある」と語る。また「フィルム代は掛かるし、現像に出せば時間も掛かる。しかし、だからこそ1枚1枚のコマを大切に写す気持ちや『どう写っているのか？』などと出来上りを期待する気持ちも生まれる」——それが「ドキドキ」「ワクワク」して楽しいという。

「写したらプリントにすること。そして、それを他の人に見せて感想を分かち合う。そこに交流のきっかけが生まれ、人の心を癒すことにつながるのではないか？便利な機器が発達した反面、人と人との距離感が掴みにくくなった時代、だからこそ『おもカメ』の存在価値があるのでは？と思う」。